

あこがれの^{たいが}大雅の半分になりたい！ だから半雅^{はんが}！



半雅は、本名を阿部久平といい、半雅という号を名乗っていました。明治後期から昭和初期に画人として活躍し、山水や竹や花などを描くことを得意としました。

半雅は、1854(安政元)年に樋ノ入に生まれました。石碑によると、若いときに濁川の真嶋塾で詩文を学び、その後、樋ノ入の戸長など公の仕事をして、地域の人のために尽くしました。

公職を退いたあと、本格的に画を学び、特に50歳を過ぎてから多くの作品を描いたと伝えられています。半雅は、池大雅の作風を好み、手本としていました。半雅という号も、「大雅のせめて半分くらいまでにはなりたい」という願いをこめて、名付けられたものです。

また、展示会への出品などを通して、ほかの画家などの文化人とも広く交流を持っていました。当時の写真からは、鈴木香雲や森華江、野村孤村(北海酔道人の甥)、大久保正太郎(86ページ)などと交流があったことがわかっています。

半雅は、1933(昭和8)年に亡くなりました。地域の人々や画友は半雅をしのび、1937(昭和12)年に松枝神社境内に石碑を建てました。碑の題名「阿部半雅翁之碑」と書いたのは、濁川の真嶋桂次郎(木崎村小作争議の地主側の中心人物)です。



蜻蛉胡蝶図
1919(大正8)年作

MEMO

池大雅 (1723~1776)

江戸時代中期の南画家・書家。伝統的な日本画や西洋画法なども取り入れながら、独自の南画様式を確立しました。

鈴木香雲 (1900~1977)

北区嘉山に生まれました。日本画家で、「鯉の香雲」と呼ばれ鯉の画を得意としました。

森華江 (1899~1966)

1953(昭和28)年ごろから葛塚に住み、のち月岡や新発田に居住しました。花鳥風月など伝統的な日本画作品を多く残しました。



阿部半雅翁之碑(樋ノ入 松枝神社境内)